

2014年度入試の問題分析

① 出題傾向

一般入試 前期A日程の2日程の両方とも、出題形式は記述式とマーク式の併用で、前年度と同様であった。本学では、1995年度までは全問マーク式の出題であったが、1996年度からは記述式・マーク式の併用となっており、この形式が完全に定着している。また、各日程で大問3題は変化なく、小問数は各日程で55～62問であった。前年度の小問数は60～65問で、量としては本年度もほぼ同じであり、ここ数年はほとんど変化がない。また、記述式とマーク式の割合は、各日程で多少のばらつきがあるものの、本年度の記述式の割合は27～40%、全体としては約33%であった。前年度は約36%、2012年度は約42%、2011年度は約37%、2010年度は約40%、2009年度は約31%、2008年度は35%、2007年度は約38%、2006年度は約42%、2005年度は約44%、2004年度は約66%、2003年度は約72%であったことと比較すると、2005年度以降に記述式の割合が大幅に減少している。記述式・マーク式ともに空欄補充と下線部設問の問題が中心であるが、正誤判定問題や地図問題も多く出題されている。

② 出題内容

アジア・アフリカ史と欧米史の割合は、年度によって変化があるが、本年度はアジア・アフリカ史：欧米史が67%：33%であった（前年度はアジア・アフリカ史：欧米史が71%：29%）。また、本学ではアジア史と欧米史の複合問題が毎年出題されるが、本年度も「戦争や軍事組織がもたらした影響」一般入試 前期A日程<1/27>や「鉄道の歴史」一般入試 前期A日程<1/28>などが出題された。さらに「アジアの民族運動家」一般入試 前期A日程<1/27>など、盲点となりやすい周辺地域からの出題があることには要注意であろう。出題分野では、「漢字と周辺諸民族の文字」一般入試 前期A日程<1/27>や「人類の進化」一般入試 前期A日程<1/28>などのテーマ史も出題されている。このようなテーマ史は、本学の出題の特徴の一つで、時代・地域ともに幅広く出題されることが多いので、偏りのない学習が肝心であろう。

③ 出題範囲

先史時代から現代までバランス良く、幅広く出題されている。また、本年度は出題されなかったが、2011年度には第二次世界大戦後のみをテーマとした大問が出題された（2010年度も1題出題）。さらに空欄や設問で第二次世界大戦後の事項を問う問題は、本年度は2日程中の1日程で出題されている。高3生諸君は現代史の学習を怠らないように注意すべきである。

④ 難易度

ほとんどの大問で正誤問題が出題されており、あいまいな知識では失点しやすい。一部の正誤問題には細かい事項を問うものも見られるが、ほとんどが教科書レベルの標準的事項の正誤を問う問題である。それだけに、正確な知識を身につけておきたい。また、中国史での誤字や現代史・文化史などでの失点が合否を左右することになるだろう。

学習アドバイス

① 書いて覚える学習

本学の世界史問題は記述式とマーク式の併用で、記述式問題を正確に答えることが重要である。誤字などのケアレスミスによる失点をなくすることが、攻略の大きなポイントとなるであろう。このためには、特に中国史を中心に、教科書に出てくる基本事項を常々書いて覚える学習を心がけることが肝要である。本年度の入試でも、両方の日程で中国史の記述式問題が出題されている。ここで誤字のために大量に失点すると、合格はかなり困難になる。日頃から努力を惜しまず、書いて覚える習慣を身につけたい。

② 偏りのない学習

本学では、毎年のように第二次世界大戦後までを扱った問題が出題されているだけに、やはり古代史から現代史まで偏りのない学習を進めておきたい。また、正誤問題は正確な知識を身につけておかないと答えられない。きちんと教科書や用語集の記述を確認しておこう。さらに、政治史を基本とした学習が進んだら、文化史にも目を配るように注意したい。本学では文化史は「必ず出題されるもの」と考えておいた方がよい。文化史の対策なしに受験することは、初めから大きなハンデを背負うようなものであろう。本年度は図版を用いた文化史の出題があったので、教科書や図説の写真を確認しながら学習を進めることは重要である。さらに、地図問題がよく出題される傾向があるので、普段の学習から歴史地図を用いて、重要な都市や河川などの位置を常に確認し、地理的な感覚を身につけるようにしたい。

③ 過去問の学習

本学では、過去に出題されたものとはほぼ同じテーマ・内容の問題が出題されることが多い。従って、過去問の学習をしておくことは、学習対策として極めて有効である。受験本番までには必ずこなしておくようにしたい。